

馬弩関考

手塚隆義

一

馬弩関という称呼は、漢書・昭帝紀の始元五年（前八二）の条に

夏、罷天下亭母馬及馬弩關

とあって、この名称で呼ばれていた関の存在したことが判る。

この名称の由来に就ての応劭の註には

武帝數伐匈奴、再擊大宛、馬死略盡、乃天下諸亭養母馬欲令其繁孳、又作馬上弩機關、今悉罷之

とある。亭母馬は武帝が元鼎四年（前一一三）に、官に命じて母馬を貸して増殖を計ったことを指すものである。馬弩関に就て孟康は

舊馬高五尺六寸齒未平、弩十石以上、皆不出關、今不

馬弩関考（手塚）

禁也

と註し、馬匹と弩とに一定の規格を設けて、関外への搬出を禁止したものとしている。この兩註を批判して顔師古は

亭母馬應說是、馬弩關孟說是也

としている。馬弩関を馬上で操作する弩機などと解釈した応劭説の当らぬことは言うまでもないことで、馬弩関は孟康・顔師古の解のごとく、馬匹と弩機とが関外へ流出するのを禁止した為めに、この名称で呼ばれたものである。

それならば、馬弩関による規制の対象、および実施の時期、さらにその目的は何であつたろうか。

二

漢代には外地との辺境に関が設けられていた。いわゆる辺関である。彼我の使者や商賈はここを通過して往来し、交

易も亦その場所で行われた。すなわち関市である。

西南夷の居住地に対しては、史記・司馬相如伝に

司馬長卿便略定西夷、邛・笮・毋騶・斯榆之君、皆請
為内臣、除辺關、關益斥、西至沫・若水

とあって、漢の進出にともなう両者の境界が変り、辺関も移動したことが知られる。また南越国に就ては、史記・南越列伝に

高后時、有司請禁南越關市鐵器、佗曰、高帝立我通使
物、今高后聽讒臣、別異蠻夷、隔絕器物、此必長沙王
計也、欲倚中国、擊滅南越、而并王之、自為功也、於
是佗乃自尊號為南越武帝、發兵攻長沙辺邑、敗數縣去
焉

とあって、南越国との関市が行われ、その交易品の品種による統制が行われ、それに關聯して紛擾が起こっている。

漢と周辺諸国との内で、最も関市による交易の盛んであったのは、北方の匈奴とである。漢書・匈奴伝の贊に

逮至孝文、與通關市、妻以漢女、增厚其賂、歲以千金
とある。漢と匈奴との境界は、史記・匈奴伝に載する文帝
が老上單于に遣はした書面に

先帝制、長城以北引弓之國、受命單于、長城以内冠帶
之室、朕亦制之

とあるごとく、長城に拠つて明確であり、塞内と塞外との

たれた時期であつて、その閉鎖は交渉の断絶を意味する。

史記・匈奴伝に

自馬邑軍後五年之秋、漢使四將軍各萬騎擊胡關市下
とあって、関市の継続によって侵犯に堪へていた漢は、こ
こに関市に蟄集した匈奴に対し、一斉に攻撃をしかけるこ
とによって、正式に国交を断絶して全面的な戦争状態に入
つたのである。

漢が塞外諸族との交易である関市に当つて、相手の国
——または種族——の国力の増強を防止する国策上、物資
の品種によって搬出を禁止していたことは、既にあげた南
越国に鉄器を賣ることを禁じていたことで明らかである。

漢書・両越伝に

高后自用臨事、近細士、信讒臣、別異蠻夷、出令曰、
毋予蠻夷外專金鐵田器馬牛羊、即予、予牡、母與牝、
老夫處辟、馬牛羊齒己長

とあって、南越国の趙佗が、漢が牝を除いて牡のみを給し
たために、国内の動物は繁殖せず絶滅に瀕している苦境
を、文帝の使者陸賈に訴えている。漢はやがては不利な情
勢の来るのを恐れ警戒して、このように慎重な政治上の配
慮をしているのである。

もとより、このような方針は、南越国に限られたもので
はなく、塞外諸国に対して一貫して採られたのであろう。

馬弩関考（手塚）

交易は、専ら長城に設けられた関市に於て行われ、それ
以外での取引は禁制であった。史記・匈奴伝に

漢使馬邑下人聶翁壹與奸闌出物、與匈奴交、詳為賣馬
邑城、以誘單于

とあるのは、漢が老上單于を誘き寄せて虜にしようと計画
し、匈奴に対して聶翁壹なる人物に故意に規定を破った取
引きを申し込ませたのである。高祖の平城での大敗より武
帝が戦端を開くまでは、匈奴は漢を圧倒していたので、関
市は交易の形で多分に匈奴の要求する物資を供給すること
によって、侵犯奪略を緩和する目的をも有っていたのであ
る。史記・匈奴伝には

孝景帝復與匈奴和親、通關市、給遺匈奴、遣公主如故
約

また同書に

今帝（武帝）即位、明和親約束、厚遇、通關市、饒給
之

さらに

自是之後、匈奴絶和親、攻當路塞、往往入盜於漢辺、
不可勝數、然匈奴貪、尚樂關市、嗜漢財物、漢亦尚關
市不絶、以中之

などである。

したがって関市の存在は、すなわち両者の間に平和の保

三

中国の国内にあつては、関は戦国割拠の時代はもとより
であるが、漢代に至つても存在した。その最大の目的は、
竟寧元年（前三三）元帝に対する侯応の言の内に

自中国尚建關梁以制諸侯、所以絶臣下之覬欲也⁽¹⁾

とあるごとく、漢朝の諸侯に対する政治上の配慮にある。

漢代の関は存廃が行われた。漢書・文帝紀の十二年（前
一六八）の条に

三月、除關無用傳

とあり、それに就ては史記・孝文本紀に景帝の詔として

孝文皇帝臨天下、通關梁不異遠方

とみえ、路温舒はこれに就て

文帝永思至慎、以承天心、崇仁義、省刑罰、通關梁、
一遠近⁽²⁾

と言っている。傳は通過の証で刻木・繒帛の二種があり、
これを関の出入に當つて用ひるのが常制であった⁽³⁾。しか
し、一統の代にあつて関の存在は、人士の往來の自由、物
資の円滑な流通の障害となることは言うまでもなく、した
がつて廃止は、遠近を一ならしめる泰平徳治の現われでも
あったのである。文帝に任へた賈誼は「関を建つるは大抵

山東の諸侯に備へんが為め」であるとし、「兼愛無私の道を行ひ、関を罷め天下を一通」せしむべきを説いた。⁽⁴⁾ 廃止には誼の意見が影響しているよう。

しかし、史記・孝景本紀・四年（前一五三）の条に復置津關、用傳出入

とあって、関は復活されたが、これは前年の呉楚七国の乱後の動揺に対応するためであった。⁽⁵⁾

以上のように、漢は国内の関の存廃を行ってきたが、それは諸侯国の動静を警戒し対応する措置であった。

四

昭帝・始元四年に廃止となった馬弩関とは、塞外との関であったか、または国内の関であったか。

従来はこれを北方の強敵匈奴の戦力増強を防止する処置とする解釈が行われ、それに就て異論を聞かない。

馬弩関は巨大な弩機と壯馬⁽⁷⁾の関外への搬出を規制したものである。漢は種々の方法で馬匹の増殖に努めたほどであるから、その国外への流出は抑制しなければならなかったことは、当然であろう。とくに匈奴に対しては先方の戦力の増強に繋がるのである。しかし、匈奴にとって馬匹の重要性は言うまでもない。してみれば、漢と匈奴の双方共に

馬匹は、有無を交換する関市での交易の対象とはならないものであろう。それを漢側で取り上げて特に規制しているとするのは納得し難いことである。更に馬匹の内でも壯馬以外が特に規制の対象より外されていることも、怪しむべきことであらう。匈奴がこの規制に従って矮小な牡馬を過ぎた馬匹などを、受け入れるとは、始めから予想されぬからである。このように考えると、馬弩関の馬匹の関外流出禁制は、匈奴に対してのものではなかったのではないか、という疑いを有つのである。そして、この禁制は即時に役立つ馬匹を規制の対象としている点で、漢初以来恒久的に存したものはなく、ある差し迫った特殊な情勢に対応する為めに、緊急にとられた措置ではなかったか、と思われるのである。

弩は

弩不可以及遠、與短兵同（漢書・鼂錯）

高鳥盡而強弩藏（淮南子・説林訓）

疆弩之極矢、不能穿魯縞、衝風之末力、不能漂鴻毛（史記・韓長孺）

以天下攻齊、如以千鈞之弩決潰瀧也（史記・穰侯）

以漢之強攻於匈奴之衆、若以強弩潰瀧疽（塩鉄論・伐功）

などであるように、矢を遠距離に飛ばせること破壊力の

強烈なことは、弓箭の比ではない。また、予じめ弦を引いて牙に懸け矢を装置する、いわゆる弩を張って満を持する状態におけば、引金を引くことによって、瞬間矢は発射される。

冒頓乃開其關一角、高帝出、欲馳、嬰固徐行、弩皆持

滿外鄉（漢書・夏侯嬰）

百余騎馳赴營、營皆張弩持滿指之（漢書・陳湯）

したがって、目標に対し標準を着けておくことができるので、命中率は高く武器・獵具として頗る有効である。

乃令入海者齎捕巨魚具、而自以連弩候大魚出射之（史記・秦始皇本紀）

記・秦始皇本紀）

始皇初即位、穿治鄴山、及并天下、天下徒送詣七十余万人、穿三泉、下銅而致椁、宮觀百官、奇器珍怪、從藏滿之、令匠作機弩矢、有所穿近者輒射之（史記・秦始皇本紀）

したがって、狙撃に適すること、これ以上の武器は無い。

項王怒欲一戰、漢王不聽、項王伏弩射中漢王（史記・項羽本紀）

項羽本紀）

聞漢天子甚怨衛律、常能為漢伏弩射殺之（漢書・蘇武）

周顯王二十八年（前三四一）に齊將孫臏が、龐涓の率いる魏軍を馬陵に待ち伏せて潰滅せしめ、一躍名將の名を高

からしめたのは、以上の弩の有つ特性を、遺憾無きまでに活用することによって齎らされたものである。⁽⁸⁾

弩はこのように秀れた武器であり、その巨大なものに至っては効力絶大で、火炮出現の以前にあっては、最も進歩した重兵器であった。⁽⁹⁾

しかし、弩の缺点是操作が弓のように簡単ではなく、漢代の弩の射法は弦を引いて牙にかけ矢を装置し、脚を以て機を踏んで発射するので、力と時間とを要することである。申屠嘉は弩を有つ部隊に属し操作に秀れていたのを以て、高祖に従って項籍との戦いに参加し、それが出世の緒となっていた。⁽¹⁰⁾

弩は馬上にあつては使用できず、したがって遊牧騎馬の民族にとっては無縁の武器である。匈奴は漢が「引弓之國」と呼ぶほど射術を得意とし、鼂錯が漢と匈奴との戦闘力を比較し論じた内で

險道傾仄、且馳且射、中國之騎弗與也⁽¹¹⁾

と言っている程であるが、武器としては

其長兵則弓矢、短兵則刀鋌⁽¹²⁾

とあるごとく、弩は有たない。その習性は

其俗、寬則隨畜、因射獵禽獸為生業、急則人習戰攻以侵伐、其天性也；（中略）：利則進、不利則退、不羞遁走⁽¹³⁾

とあって、馬匹の脚力を利用して迅速に進退するのであり、したがって

善為誘兵以冒敵、故其見敵則逐利、如鳥之集、其困敗、則瓦解雲散矣⁽¹⁶⁾

のごとき戦術を行うのであって、一定の地域に執着して占守防禦などはしない。もとより城郭などは有たない。

逐水草遷徙、毋城郭常處耕田之業（史記・匈奴）

蠻夷無金城強弩之守（漢書・陳湯）

大夫曰、匈奴無城郭之守、溝池之固、修戰強弩之用、倉庫府庫之積（塩鉄論・論功）

漢より投降した衛律は、守勢に立った匈奴を、漢軍の攻撃に備えて、漢土での経験を生じて築城に着手はしたもの、胡人は城守ができず反って糧を漢軍に遺す結果になる、との反対論に会って、中止に追い込まれている⁽¹⁷⁾。

畢竟、弩、とくに巨大な弩機などは、匈奴にとつては無縁の武器であった。

以上、考察し来ったことに従えば、壮馬と巨大な弩機との流出を規制した馬弩関は、これを匈奴との関市とする馬匹は漢と匈奴の双方共に欲求するものであって、両者交易の対象とはならないものであるし、その上とくに禁制を壮馬に限っていることも、長い期間続いた関市に於ては、すでに強壯の時期を過ぎている馬匹のみを、受け入れ

る筈もなく、匈奴との関市ではなかったのではないか。さらに巨大な弩機に至っては、必要としない武器である。関市の交易に就ては一応両者の協定の下になされたであろうが、もしも匈奴にとつて巨大な弩機が是非とも要求したならば、これを漢側の一片の規制で一方的に禁止し得たとは考えられないのである。高祖の平城での敗戦以来、匈奴の勢力は断然優位にあって、漢は圧倒せられて屈辱的な外交を余儀なくせられていたからである。

したがって、漢が塞外へ搬出される物資や動物に品種・性別による統制を行なったことは、南越の場合にみられるごとくであるが、この馬弩関による取締りは、匈奴を対象としたものではなく、また漢初よりあったものでもなく、ある特殊な事態に対処する目的で、急ぎとられた措置ではなかったか、と考えるのである。

五

馬弩関が漢初より長期に亘って存在したものでないと思えば、この禁令の発動は、廃止された昭帝・始元二年よりあまり隔たらず時期、武帝治世の間のことではなかったか、と思われる。

漢の国内の関の最も重要な目的は、諸侯に備えるにあ

る。したがって、情勢の変化や諸侯の動向に対応して存廃をしたのである。漢初より漢室を悩ました諸侯の問題は、景帝の代の呉楚七国の乱の鎮定を以てしても、全たく消滅したのではなく、したがって武帝が諸侯に対しての監察警戒を緩めなかったことは、登位後数年に入朝した中山王勝が、歎息して苛酷な検察を訴えたこと⁽¹⁸⁾で明らかである。武帝にとつて最も危惧すべきは淮南王安の存在であった。安は高祖の孫、父景帝の従兄であり、武帝登位⁽¹⁹⁾のときは四十余歳であった。彼れの父の淮南王長は謀叛が発覚し、流刑の途にあって食を絶つて死んだ。長の三子の安・勃・賜は、義弟を死に追い込んだ世評を苦にした文帝によって封侯せられ、やがては王に封じられ、呉楚七国の叛乱にも加盟せず存続していたのである⁽²⁰⁾。

武帝は淮南王安を諸父として崇め、芸文を好む嗜好の一致したことから親しみを有ち、元朔二年（前一二七）には几杖を与え朝することを免除するなど、努めて優遇はしたが、本より気を許してはいなかったであろう。

先に長の死後、遺児安等の将来を最も憂慮したのは賈誼である。彼れは文帝が長の三子を侯としたのに就て、やがては王とするのを危惧して諫めたが、その文中で淮南王長の叛意は明らかであり、その行動は悖逆亡道と極めつけ、安等を「罪人の子」と呼び、「この人少しく壮たらば

豈に能く父を忘れんや」と極言している。しかし、文帝はこの言を容れず三子を淮南の他を三分して王とした。誼が上疏中で、高祖が黥布を破って漢室が存続し得たのは僥倖のみ、と言った淮南の地に、この長が王となっていたのである⁽²¹⁾。

武帝の賈誼の才能に対する評価は頗る高く、むしろ傾倒していたかのごとくである。登位後早々に誼の孫二人を抜擢して郡守に任じているのは、その現れであろう。誼が治安策の内、先づ諸侯の勢力強大で漢室を凌ぐものがあるのを憂ひ痛哭すべきこととして論じたり、また東方の諸侯に備えての諸皇子の封国増強の意見が文帝に容れられ、後ちの呉楚七国の乱に当って効果を現わしたことなど、その説くところが肯綮に当たったことが、信頼を高めたとしても不思議はない。武帝は正月を歳首とし漢を土徳とし色は黄を上げ数は五を用うるなど誼の主張を多く実施に移して⁽²²⁾いる。また、交戦中の匈奴よりの投降首酋に対する破格な優遇なども、誼の治安策の五餌三表の懷柔策を多分に採り入れたものと考えられる。このような武帝が、長の遺児達とくに淮南王安に対して、強い警戒心を懐いていたと考えるのは、極めて自然であろう。

淮南王安としても、呉楚七国の乱に際して、相の張釋之に阻止せられて実行には至らなかったものの、自身は叛軍

に加わる決心をしており、武帝の代となっても帝位を望んでいたのであって、建元六年(前一三五)の彗星出現を大乱の徴と判断し、未だ太子が定まっていなかったので、一たび事が起れば諸侯紛乱すると予想し、その機に応じようと密かに武器を集め戦備を整えているし、その後も帝たらんとする野望を棄ててはいなかったのである。⁽²⁵⁾このような行動が、諸侯に対する監察の厳しい折に、漢側に全く察知されていなかったとは、到底考えることができないのであって、やがて何らかの対応策がとられたとしても怪しむに足りない。

六

武帝に対する政策進言者には主父偃・嚴安・徐樂等がある。その内において諸侯の動静を警戒し、勢力削減の策を述べたのは主父偃である。彼れは僅かの期間にいくつかの意見を上申したが、諸侯の国力を弱める方法として、要請があれば嫡子以外の子弟にも封地の分與を認める案を説いた。元朔二年(前一二七)に発布された推恩令である。⁽²⁶⁾令は名の示すごとく表面は諸侯の嫡子以外の子弟にも帝恩を推し広める恩情のようであるが、眞の狙いは侯国の細分による弱体化にある。もとより諸侯としても、この令の目的

が奈辺にあるかが察知されぬ筈もないし、又したがって対応の如何が天子の心証に直ちに影響することも判らぬことはない。しかし、このときの淮南王安一族の令に対しての反応は、次のごとく冷淡なものであった。

王有孽子不害、最長、王弗愛、王・王后・太子・皆不以為子兄數、不害有子建、材高有氣、常怨望太子不省其父、又怨時諸侯皆得分子弟為侯、而淮南獨有二子、一為太子、建父獨不得為侯、建陰結交、欲告敗太子、以其父代之。⁽²⁷⁾

すなわち、安およびその一族は、たとえ忌まれていたにせよ孽子の不害を侯としようとせず、令の真意を無視して、国の細分化に応じようとしなかったのである。このような態度が漢室を失望させ、一層猜疑の念を強からしめたことは、けだし当然であろう。

主父偃は推恩令の建策の内では

今諸侯或連城數十、地方千里、緩則驕奢、易為淫亂、急則阻其疆而合從、以逆京師。⁽²⁸⁾

と警告している。ひとたび事が起れば、叛乱諸侯合從の盟主ともなるべき淮南王に対する懸念は、並々ならぬものがあつたであらう。

軍事力で漢室が東方諸侯に較べて優っているのは、戦車と騎兵とである。嘗て呉楚七国の乱の際に、呉王濞は桓将

軍の

呉多步兵、歩兵利險、漢多車騎、車騎利平地、願大王所過城邑不下、直弃去、疾西據雒陽武庫、食敖倉粟、阻山河之險、以令諸侯、雖毋入關、天下固已定矣、即大王徐行、留下城邑、漢軍車騎至、馳入梁楚之郊、事敗矣。⁽²⁹⁾

との言を却けて、睢陽の攻略に固執し、その間に匈奴生まれの漢將頼当の率いる騎兵団が、長驅して叛軍の軍糧の集積地である淮・泗の合流点を襲って占拠するにおよんで、全軍潰乱するに至ったのである。⁽³⁰⁾いわんや武帝の代に至つては、名将衛青に率いられ匈奴との戦闘に練磨された漢の騎兵戦力の充実が、景帝の代の呉楚七国の乱当時の比ではなく、東方諸侯のそれは比較すべくもない。淮南王が叛したとき最も恐れた衛青大將軍の人となりを、呉被に問うたのに対して、彼れは

臣所善黃義、從大將軍擊匈奴、言大將軍遇士大夫以禮、與士卒有恩、衆皆樂為用、騎上下山如飛、材力絶人、如此、數將習兵、未易當也。⁽³¹⁾

と答えている。このような状態にあつて拳兵すれば、勝敗の歸趨は明らかである。ここに於てか急速な戦備の充実に迫られた安にとっては、騎乗および戦軍用の馬匹、それも直ちに役立つ壮馬の獲得こそ、急務であつた筈である。

馬弩関考(手塚)

また、壮馬と共に是非とも必要としたのは、防守に當つて絶大な効力を發揮する弩機であつた。漢としては東方に叛乱の起つた際に、最も怖れたのは、諸侯が動揺して合從の形勢を招き、天下の大乱となることであり、またその懸念は充分にあつたのであつて、したがって討伐は迅速に完了させねばならない。これに対して叛軍は防守時をかせいで、その間に諸侯を糾合し、合從して漢軍に當ることが必要である。このような事態に叛軍にとって巨大な弩機の有無は、戦局に多大な影響がある。呉被は淮南王安の策戦の諮問に答えて

南收衡山以擊廬江、有尋陽之船、守下雒之城、結九江之浦、絶豫章之口、彊弩臨江而守、以禁南郡之下、東收江都・會稽、南通勁越、屈彊江・淮間、猶可得延歲月之壽。⁽³²⁾

と、河川を隔てて強弩を以て漢軍を阻み、防戦することの得策であることを進言している。

もしも、淮南王安が拳兵に備えて、是非とも必要として獲得しようとした、即時戦力として役立つ壮馬と巨大な弩機とを、特に指定して関外流出を禁止した、いわゆる馬弩関が、武帝の代に急遽設けられたものとすれば、その進言は、推恩令の提案者である主父偃、その人によってなされたものではなかつたらうか。

劉向が新序・善謀第十で、孝武皇帝時、中大夫主父偃策
曰として推恩令を載せ、それに続けて

於是上從其計、因關馬及弩不得出、絶遊説之路、重附
益諸侯之法、註誤其君之罪、諸侯王遂以弱、而合從之
事絶矣、主父偃之謀也

と述べているのは、馬弩関を偃の策と解したものと思われ
る。後れて王益之が、推恩令發布の元朔二年の条に、新序
の文を採って、

主父偃謀、關馬弓弩不得出云々⁽³⁴⁾

と載せているのは、やはり劉向の説に従ったものである
う。

漢が国内の関に就て、馬匹の関外流出を規制したのは、
この場合に限らない。溯って漢書・景帝紀・中四年（前一
四六）、の条には

御史大夫綰奏、禁馬高五尺九寸以上、齒未平、不得出
關

とあって、衛綰の上奏によって、壯馬の搬出を禁止する措
置が採られている。国内の関は既に述べたごとく文帝十二
年に廃されたのが、呉楚七国の乱後の処置として、翌四年
に復活されている。それが更に中四年に至って衛綰の上奏
に依って、壯馬の関外流出が禁止となったのは、景帝の弟
の梁王武の不穏な行動に対応する為めであつたろう。武は

呉楚七国の乱に当つては、呉楚の大軍を引き受け睢陽を堅

守し、以て漢室の危急を救つた功勞者ではあつたが、太后
の寵を頼んで僭越な行為が多く、天子の旌旗を賜わり出行
の形式は天子のそれに擬し、天下の豪傑を集め弩弓矛數十
万を製造し、府庫には金銀百鉅万を蔵し、以て帝位を窺つ
ていたのである。⁽³⁵⁾ おそらく、衛綰は壯馬が関外へ出て梁王
の戦力となるのを警戒して、この上奏となったものであら
う。綰自身は嘗て呉楚七国の折には、河間王の太傅であり、
兵を率いて叛軍を撃ち建陵侯に封じられたのであつて、し
たがって漢と諸侯との軍事力の差が、強力な騎兵と戦車の
有無にあることを、実地に経験していた筈である。

以上の考察に従えば、馬弩関と呼ばれた関は、衛綰が景
帝の代に梁王武に備えて、壯馬の関外流出をしたごとく、
おそらくは主父偃が、武帝に策して淮南王安の拳兵と、そ
の戦力増強とを防止する為めに、壯馬と巨大な弩機との関
外への搬出を禁制したものであつたろう。

七

昭帝・始元四年に至って馬弩関の廃止をみるに至つたの
は、漢室にとって諸侯国への警戒が、もはや不必要となつ
たのに因るものであつたろう。推恩令によって細分され弱

小化された侯国は更に十五年後の元鼎五年（前一一二）

の酎金律によって、追ひ打ちをかけられた。諸侯が宗廟に
献ずる黄金の鮮度や目方の不足を以て、不敬との難癖をつ

けられ、強引に一〇六人の列侯が、一挙に除かれたのであ
つて、この理不尽ともいふべき処置に対しても、すでに弱

体となった侯国は、抵抗する力も無く、易々として処分さ
れたのであつて、漢初より漢室を悩ました諸侯の問題は、

ここに解消されたのである。昭帝の代に至つては、その登
位に就て異母兄燕王旦の不满蠢動があつたにせよ、霍光が

幼帝を輔佐して漢室の威力は、微動だにしなかつたのであ
る。

昭帝の治世には、先づなによりも前代武帝の諸事業に対
する反省検討が必要であつた。雄略大才と評された武帝

が、国の内外に行つた諸事業によって、国帑は困窮し民力
は疲弊して社会不安をきたし、拡大した辺境の国土の経営

の維持にも苦しむ状態であつた。即位の翌年に賢良を挙げ
て、人民の疾苦するところを問うたのは、その現れであつ

て、塩鉄専売の継続の可否が論じられ、やがては辺境の郡
の廃止統合による整理が行われるに至つた。

すでに存続の必要が失われた馬弩関の廃止は、このよう
な趨勢の裡で行われたものであろう。（一九八一・三・二七）

註

馬弩関考（手塚）

(1) 漢書・卷九十四下・匈奴

(2) 漢書・卷五十一・路温舒

(3) 内藤虎次郎博士「三井寺所蔵の唐過所に就て」（説史叢

録）湖南全集・第七卷

(4) 賈誼の関廃止の意見は、新書・卷三「壹通」にみえる。
文中に罷関一通天下、無以区區独有関中者、所謂禁游官諸
侯、及無得出馬関者云々とある。盧抱経の重刻本新書には
文中の馬を武に作っている。馬を正しとすれば、文帝の代
にあつても馬匹が関外へ出ることが、問題となつていた証
にならう。

鎌田重雄博士によれば、賈誼は文帝十二年に歿した「漢
書賈誼伝について」（秦漢政治制度の研究）が、前年の十
一年の近親王国の増強による侯国対抗策の上疏が、翌十二
年に実施されているので、関廃止もそれと同じく十一年に
上申されたのが、翌十二年に実行されたのであろう。

(5) 漢書・卷五・景帝紀の応劭註、文帝十二年、除関、無用
傳、至此復置傳、以七國新反備非常

(6) 江上波夫氏「漢と匈奴との貿易、関市に就きて」（史学
雜誌・第四十七篇・第六号）「馬弩関と匈奴の鉄器文化」
（ユウラン古代北方文化）。江上氏は馬弩関を漢が匈奴
の国力増強を防止する為めに、壯馬と巨大な弩との流出を
禁じたものであつて、その廃止により、鉄の輸出が解禁さ
れ、匈奴は鉄器時代に入ったと論説せられた。平田俊春氏
の（最新歴史年表）の昭帝始元四年の条に、馬弩関を廃
す。是より匈奴鉄器時代に入る。とあるのは、これに従わ
れたものであろう。また、A. M. フールスウェ氏が、国境

交易場の存在したこと、そこで道具や武器の輸出は全く許されず、弩と若く大きい馬とは厳禁せられていた「漢代における絹貿易の要因」(東方学・第四十七輯)と述べられたのは、馬弩関を指して言われたのであろう。

- (7) 漢書・景帝紀・中四年の条の禁馬高五尺九寸以上、齒未平、不得出關に、服虔は註して「馬十歳齒下平」とある。馬は十歳を過ぎると力が衰えると言はれる。

- (8) 龐涓行三日、大喜曰、我固知齊軍怯、入吾地三日、士卒亡者過半矣、乃棄其步軍、與其輕銳、倍日并行逐之、孫子度其行、暮當至馬陵、馬陵道狹、而旁多阻隘、可伏兵、乃斫大樹、白而書之曰、龐涓死于此樹之下、於是令齊軍善射者、萬俱夾弩道而伏、期曰、暮見火舉而俱發、龐涓夜至斫木下、見白書、乃鑽火燭之、讀其書、未畢、齊軍萬弩俱發、魏軍大亂相失、龐涓自知智窮兵敗、乃自刎曰、遂成豎子之名、齊因乘勝、盡破其軍、虜魏太子申以歸、孫臏以此名顯天下、世傳其兵法(史記・卷六十五・孫子吳起列傳)

- (9) 徐中舒氏は管子・輕重甲第八十中の十鈞之弩について、礼記・月令の鄭玄注に三十斤曰鈞、百二十斤曰石とあることより、漢弩の二石半と説いている。「戈射弩弩之溯源及關於此類名物之考釈」(集刊・第四本・第四分、国立中央研究院歴史語言研究所)この計算に従へば、十石弩は百二百斤・四十鈞の弩ということになる。

漢書・芸文志・第十には、「望遠連弩射法具十五篇」の書名が見える。漢書補注に王應麟曰、李広伝孟康注、太后陷陣卻敵、以大黃參連弩、案周官五射參連其一、李陵發連弩射單于注、服虔云三十弩共一弦とあって、巨大な弩機の

ことがみえる。

- (10) 徐中舒氏は、前出の論文中で、弩の長所をあげて、「故在未有火器以前、此実為最進歩之利器」と言っている。

- (11) 原田淑人・駒井和愛両博士「支那古器図攷」兵器篇 東方文化学院東京研究所

- (12) 史記・卷九十六・申屠嘉

- (13) 漢書・四十九・鼂錯

- (14)(15)(16) 史記・卷一百十・匈奴

- (17) 拙稿「匈奴の城郭に就いて」史苑・第十六巻一、二

- (18) 漢書・卷五十三・景十三王伝・中山靖王勝

- (19) 史記・卷一百十八・淮南衡山王

- (20) 漢書・卷六・武帝紀

- (21)(22) 漢書・卷四十八・賈誼

- (23) 漢書補注・賈誼伝の贊の註

- 周壽昌曰、案武帝紀、太初五年夏、五月正歴、遂以正月為歲首。色上黃、數用五、似皆追行賈生之言(五年は元年の誤りである)

- (24) 拙稿「漢孝武帝の匈奴懷柔と賈誼の新書」史苑・第十巻二、三

- (25) 註(19)に同じ

- (26) 史記・卷一百十二・平津侯主父列伝

- (27) 史記・卷一百十八・淮南衡山

- (28) 註(26)に同じ

- (29) 史記・卷一百六・吳王濞

- (30) 拙稿「前漢の投降胡騎に就て」蒙古・二、三

- (31) 漢書・卷四十五・伍被

△受入図書 2△

会

狛江市史料集 第十・十一 狛江市

歴史哲学緒論 河野正通訳

泰西名著・歴史叢書 第二一八、二一十一、二一十三、二一十四

皇室制度史料 撰政(一) 宮内庁書陵部

東京都の民俗 宮本馨太郎

竹村正子遺稿 竹村正子遺稿編集委員会

史跡上人壇庵寺跡発掘調査 福島県須賀川市教育委員会

アイヌ世界への招待 柳沢幸博

発展途上地域地図目録 アジア経済研究所

前近代における都市と社会層 京都大学人文科学研究所

講座中国ⅠⅡⅢ、Ⅴ 筑摩書房

農民組織実態調査報告書 国際協力事業団

北九州市埋蔵文化財調査報告書 第六一〇集 北九州市教育文化事業団

宮崎県史料第七巻(佐土原藩) 宮崎県立図書館

日野市史料集 近世二 日野市史編さん委員会

沼津資料集成八 大平年代記 沼津市立駿河図書館

旧菊間藩士人名録(復刊) 奈良市史編集室

奈良市行政資料目録 奈良市史五五年第二集(全四冊) 奈良市史編集室

薩摩半島東部地区有形民俗資料調査報告書 鹿児島県明治百年記念館建設調査室